名古屋女子大学　紀要　63（人・社）101～106　2017

教職課程学生の学内友人関係におけるキャラと適応との関連

堀　由里

The Relation between KYARA in Friendship and Psychological Adjustment in Students in Teaching Course

Yuri HORI

問題と目的

現代青年は対人関係が希薄化し、自己開示することや傷つくこと、傷つけられることを避け、表面的な関係を求める傾向が高まっているといわれる（和田、1990）。このような研究報告から既に30年近く経とうとしているが、いまだに青年期の対人関係に関する研究も多く、課題は続いていると考えられる。

一般的に大学生ともなると友人関係の質も変化する。児童期や青年期前期（中学生）では、同質性を重視した友人関係であるギャング・グループやチャム・グループが見られ、高校生を境に異質性を重視したピア・グループに移行すると言われている（保坂、1998；榎本、2003）。特に、クラス制度から単位制度へ変化する大学などの高等教育機関で一層、友人関係の質も変化すると考えられる。

しかし、近年、大学の授業についていけなかったり不登校に陥るなど、適応が困難な学生が増加している（谷島、2005；田中・菅、2009）。大学の適応は、学業面と対人面に大別することができ（広沢、2007）、特に友人とのコミュニケーションが大学生活の充実感に影響を与えることがわかっている（見舘・永井・北澤・上野、2008）。異質性を重視した大人の対人関係の持ち方に移行した後の学生でも、友人関係で悩み、トラブルを抱えているのである。原田・尾関・津田（1992）の大学生を対象にした調査では、「最もストレスを感じていること」を自由記述させた結果、人間関係に関するものが全体の23.8％を占めていた。また青年の精神的健康を維持する機能として友人関係が重要である（松井、1990）ことから、大学生にとって、重要な友人関係がストレスの原因にもなり、悩みのタネとなっていることがわかる。

ところで、現代青年の友人関係における一つのキーワードとして“キャラ”を挙げることができる。「いじられキャラ」や「おばちゃんキャラ」など、集団の中での個人の立ち位置や役割を表す若者言葉として多用されている。千島・村上（2016）は“キャラ”を、小集団内での個人に割り振られた役割や、関係依存的な仮の自分らしさと定義している。千島ら（2016）の研究では、中学生と大学生を対象にキャラの有無、その受け止め方やキャラに合った行動をしているかどうか、更には自尊感情、自己有能感、本来感といった心理的適応との関連性を調査している。その結果、中学生は友人から与えられたキャラを受容しにくく、キャラに合わせてふるまうことが不適応と関連し、大学生はキャラに合わせて行動することと適応には関連がみられず、与えられたキャラを消極的にでも受容することが、居場所感の高さと関連していた。

千島ら（2016）の研究では、学校段階によって結果が異なっており、対人関係の質も成熟するであろう大学生ともなるとキャラの影響は大きくなかった。しかし、アイデンティティの確立がされないまま社会人になる学生が増えるなど青年期の終わりが伸びていることを考えると、全ての大学生で同じ結果が得られるとは限らない。特に、教職や保育職など資格・免許が関わる学部学科においては、クラス制度での授業形態が続く教育機関も多く、一般的な大学生とは異なる友人関係の質があると予想される。更にそのクラスは卒業まで変わらないということを考慮すると、２年間あるいは４年間、クラス内での居場所をみつけたり、限られた人間関係を壊さないように過剰に適応してしまうような行動様式が出てくる可能性がある。

過剰適応とは、環境からの要求や期待に個人が完全に近い形で従おうとすることであり、外的な期待や要求に応える努力を行うことである（石津､2006）。これは学校適応を高める反面、個人のストレス反応や抑うつなどのネガティブな側面を高めるともいわれている（石津・安保、2008）。そこで本研究では、クラス制度のある教職課程学生を対象に、学内の友人関係で付与されるキャラを受け入れているのか、また過剰適応との関連を調べることを目的とする。

方法

調査協力者および手続き

東海地方にある私大１校に在籍する教職課程の女子学生95名を対象に2016年７月、講義時間を利用して質問紙調査を行った。欠損値のあった学生を除いた63名（平均19.06歳）を対象に分析を行った。

調査内容

（１）キャラの有無と種類　千島・村上（2016）を参考に、キャラの有無と種類について尋ねた。まず「あなたは普段、友達から“あなたは△△キャラだね”などと言われることがありますか。」「ある」、「全く思いつかない」、「△△キャラだと言われない」という３つの選択肢を提示し、当てはまるものにチェックをつけさせた。その後、友達から何らかのキャラを言われている場合は、キャラの名前を自由記述で書かせた。その際、キャラが複数ある場合は、最もよく言われるキャラの名前を書くように指示した。それでも複数書いた場合には、最初に書かれたものを分析の対象とした。

（２）キャラの受け止め方　キャラが有ると答えた学生のみの質問である。友達から付与されたキャラをどのように受け止めているかを測定するために、千島・村上（2016）のキャラの受け止め方尺度（13項目）を使用した。「自分は△△キャラであることが嬉しい」などの“キャラの積極的受容”、「自分が△△キャラだと言われるのは、不愉快だ」などの“キャラの拒否”、「自分が△△キャラであろうとなかろうと、どちらでもよい」などの“キャラへの無関心”、「友達に△△キャラとして扱われるのは、止むを得ないと思う」などの“キャラの消極的受容”の４下位尺度から構成される。「とてもよくあてはまる（５点）」、「ややあてはまる（４点）」、「どちらともいえない（３点）」、「あまりあてはまらない（２点）」、「全くあてはまらない（１点）」の５件法で回答を求めた。

（３）過剰適応　石津・齊藤（2011）の大学生用過剰適応尺度（31項目）を使用した。「自分が思っていることは、外に出さない」などの“自己制御”、「人から気に入られたいと思う」などの“人

からよく思われたい欲求”、「自分には、あまりよいところがない気がする」などの“自己不全感”、「頼まれたことは、とにかくやりとげないといけないと思う」などの“他者配慮”、「日ごろからプレッシャーを感じることが多い」などの“期待に沿う努力”の５下位尺度から構成される。「とてもよくあてはまる（５点）」、「ややあてはまる（４点）」、「どちらともいえない（３点）」、「あまりあてはまらない（２点）」、「全くあてはまらない（１点）」の５件法で、得点が高いほど過剰適応傾向が強いことを示す。

（４）フェイスシート　回答者の年齢、性別について尋ねた。

結果と考察

キャラの有無の割合

分析対象データでキャラの有無の割合を算出した結果、キャラ有り群が55.5％（n=35）、キャラ無し群が44.4％（n=28）であった。

キャラの有無によって、過剰適応得点に差があるのかを検討するため、下位尺度ごとに t 検定を行ったが、有意な差は得られなかった。

キャラの類型と適応

千島・村上（2016）にならい、キャラの種類を「友人関係における役割」と「本人の性格特性」に分類し、集計した。その結果、「いじられキャラ」や「お母さんキャラ」などの役割キャラが20％（n= 7）、「天然キャラ」、や「不思議キャラ」などの特性キャラが71.4％（n=25）、記入なしが8.6％（n= 3）であった（図１）。

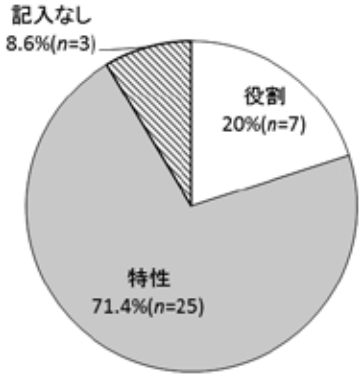

図１　キャラの類型

役割によるキャラと特性によるキャラでは、キャラの受け止め方が異なるのかを検討するため、下位尺度ごとに対応なしの t 検定を行った。その結果（表１）、個人の性格や特性によるキャラをつけられている学生よりも、友人関係における役割によってキャラをつけられている学生の方が積極的受容をしていた（$t_{(30)}$=2.13, p < .05）。拒否、無関心、消極的受容においてはキャラ類型による差はみられなかった。

また、下位尺度間の比較はできないが、全体的にキャラ拒否得点は低かった。これは、千島・

村上（2016）の大学生を対象としたデータでも同様で、大学生はキャラを受け入れやすく、積極的にキャラ行動も行いやすいことが示されている。

表１　キャラの類型による受け止め方の平均値（*SD*）

	積極的受容	拒否	無関心	消極的受容
役割	3.5 (0.31)	2.29 (0.80)	3.76 (0.66)	3.76 (0.65)
特性	3.02 (0.27)	2.28 (0.67)	3.85 (0.97)	3.85 (0.97)

次に、キャラ類型によって過剰適応得点に差があるのかを検討するために *t* 検定を行った（図２）。その結果、友人関係における役割によってキャラをつけられている学生よりも個人の性格や特性によるキャラをつけられている学生の方が「期待に沿う努力」が高い傾向にあった（$t_{(30)} = 1.96, p < .10$）。自己制御、人から良く思われたい欲求、自己不全感、他者配慮に関しては有意な差は得られなかった。

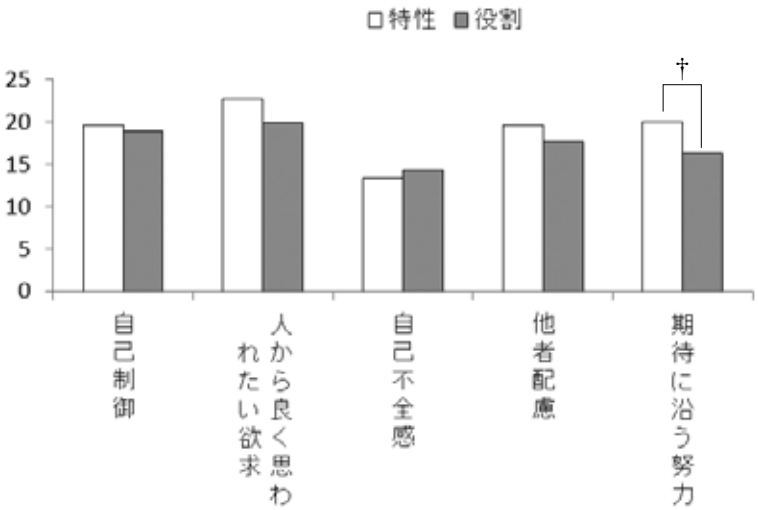

図２　キャラの類型と過剰適応得点　　†；p <.10

キャラ拒否と適応

全体的に分散の大きかったキャラに対する受け止め方の「拒否」について、平均値（M=9.06）によりキャラ拒否Ｈ群（N=16）とキャラ拒否Ｌ群（N=16）に分け、過剰適応との関連をみた。その結果（図３）、キャラ拒否Ｌ群よりもＨ群において「自己不全感」が高いことがわかった（$t_{(30)} = -2.26, p < .05$）。その他の下位尺度は有意差は得られなかった。

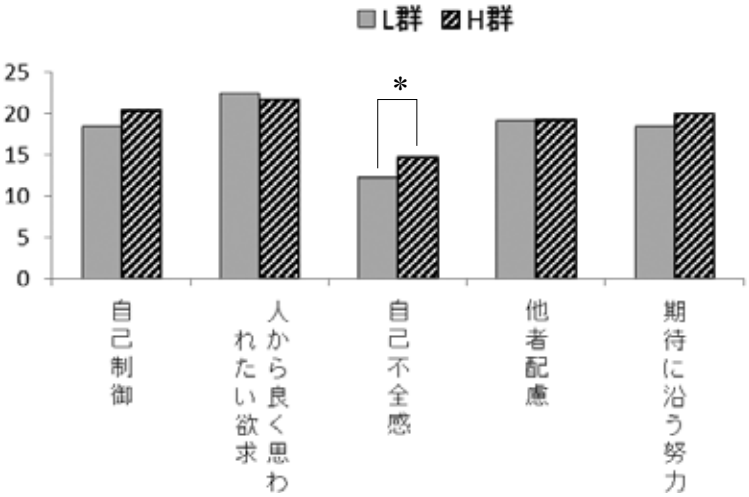

図３　キャラ拒否の高低と過剰適応　　*；p <.05

全体的考察

キャラ有りが55%、キャラ無しが45%と、およそ半々であったことは、千島ら（2016）の研究結果（有57.4%、無42.6%）と同様の結果といえる。キャラの類型に関しては、本研究では「天然」のような特性を示すキャラの方が多かったが、先行研究では役割を示す方が多かった。本研究の対象者は、在籍２年目ということで、まだ明確に役割が付与されにくいとも考えられる。在籍３年目になると、「仕切ってくれるのは○○」、「絵を描く時は△△」のように、実際の役割分担のようなものが出てくると学生の声を聞いたことがある。今後、演習の授業や現場での実習を体験していく中で、役割というものが固定化してくる可能性もある。２年目では、まだお互い遠慮しながら、徐々に自分を出しているのかもしれないと予測される。

キャラの有無と適応には関連がないというのも、先行研究とほぼ同様の結果といえる。更に、付与されたキャラの類型を受け入れているかどうかを検討した結果、役割キャラを付与されている学生の方が特性キャラを付与されている学生より積極的に受容していた。関係性が体現されるような役割キャラは、その集団での居場所感覚を手に入れる、大げさにいえば存在意義を得ることができるものなのかもしれない。

過剰適応との関連をみてみると、個人の特性をキャラとして付与されている学生の方が期待に沿う努力をする傾向があった。一見、関係性の中の役割としてキャラを与えられている学生の方が、他者からの役割期待を感じ、過剰適応しているように思える。しかし、ここでは個人の特性に由来したキャラを付与された学生の方がその傾向があることを考えると、キャラの類型に関しては再考が必要といえる。

キャラを付与されることに関しては、おおむね受け入れていると考えられるが、やや分散の大きかった“拒否”に関しては、拒否感情が高い学生ほど、自己不全感も高いという結果であった。自信のなさや他者からの評判に関してネガティブに考えてしまっており、他者との関係性の中で無理をして合わせるなど過剰適応気味であると考えられる。

今後の課題として、キャラの類型の再考が必要であると考える。役割と特性という２分割をしているが、「天然」や「不思議」キャラという特性は、そのキャラでいることによって、周りからはいじられたり、つっこまれたりしており、結果、仲間内での役割に近いことが想像で

きる。したがって、単に言葉から想像できるような２分割ではなく、関係性の中でどのような役割を担うのであろうか､そこまで考えた上で分析をすることも意味があるだろう。但し､データ数が少ないために、更にデータを増やし、傾向をつかみたい。また、今回は大学生でも教職課程というクラス単位をとっている大学の学生を対象にしていた。大学生の友人関係を探る上では、集団の特性を更に吟味して検討を続ける必要がある。

引用文献

千島雄太・村上達也（2016）．友人関係における“キャラ”の受け止め方と心理的適応－中学生と大学生の比較－　教育心理学研究、64、１-12.

榎本淳子（2003）．青年期の友人関係の発達的変化－友人関係における活動・感情・欲求と適応－　風間書房

原田雅浩・尾関友佳子・津田　彰(1992). 大学生の心理的ストレス過程ストレッサーに対する認知的評価とコーピングおよびストレス反応一九州大学教養部心理学研究報告、10、１-16.

広沢俊宗（2007）．大学新入生の適応に関する研究（１）－学習面での適応-不適応に関わる諸変数の検討－　関西国際大学研究紀要、８、121-138.

保坂　亨（1998）．児童期・思春期の発達　下村晴彦（編）　教育心理学Ⅱ　発達と臨床援助の心理学　東京大学出版会　Pp.103-123.

石津慶一郎（2006）．過剰適応尺度作成の試み　日本カウンセリング学会第39回大会発表論文集、137.

石津慶一郎・安保英勇（2008）．中学生の過剰適応傾向が学校適応感とストレス反応に与える影響　教育心理学研究、56、23-31.

松井　豊（1990）．友人関係の機能　斎藤耕二・菊池章夫（編）　社会化の心理学ハンドブック－人間形成と社会と文化－　川島書店　Pp.283-296.

見舘好隆・永井政洋・北澤　武（2008）．大学生の学習意欲，大学生活満足度を規定する要因について日本教育工学学会論文誌、32、198-196.

田中　存・菅　千策（2009）．大学生の適応に関する研究－自己意識と対人関係の視点から－ 和歌山大学教育学部紀要、59、１-８.

和田　実（1990）．青年の対人関係の変容久世敏雄（編）　変貌する社会と青年の心理福村出版、Pp.83-102.

矢島弘仁（2005）．大学生における大学の適応に関する検討 『人間科学研究』文教大学人間科学部、27、19-27.